

# トマス・リードの知覚理論

## ——直接知覚の問題(1)

はじめに

本論文は、近代における代表的な哲学者のひとりであるトマス・リードの知覚理論の中心問題である直接知覚に関する主張を考察することである。リードは、カントの言われなき酷評にあり、その影響もあって、長らくあまり省みられることなく不当な扱いを受けてきた<sup>①</sup>。しかし、二〇世紀には、チザムがリードを高く評価していたことはリード研究者の間では有名なことであるし、また、その弟子のキース・レーラーを代表とする研究者たちの努力もあって、徐々にその評価を高めていった<sup>②</sup>。また、われわれの既得信念や科学を重んじるリードの哲学が、現代の一大潮流である自然主義哲学に非常に親和性があると考えられたのも、リード再評価の大きな一因となっている。

わが国では、リードの研究は盛んに行われているとはとて

戸 田 剛 文

も言える状況ではない。ようやく近年になって、朝広氏による翻訳、また長尾氏による研究書『トマス・リード——実在論・幾何学・ユートピア』が出版された。これらの翻訳・著作はわが国のリード研究の現状を考えれば極めて貴重なものであろう。そして同時に、このようにようやくリードの再評価がわが国でも起こり始めている状況下であって、リードの研究をいっそう推し進めていくことは、意義あることであると思われる。

また、知覚の問題は、リード哲学の中心問題であるだけでなく、哲学の重要問題でもある。近代の粒子哲学という当時の最先端の科学的思想を背景に持った知覚理論が、ロックに見られるように外界の知覚の直接性を否定するように見える状況下で、知覚が直接的なものであるという常識的信念をどのように擁護するのに腐心したリードの議論は、当時よりいっそう科学的な発見を無視できない現代に生きるわれわ

れにとつても多くの示唆を与えるものであると言えよう。

以下ではまず、リードの知覚理論の枠組みを簡単に素描しよう。そして、それから、最近のリード解釈を概観し検討しつつ、何が問題であり、その問題を解決するためには、どのようにリードを解釈するべきかを論じていこうと思う。

# 一・リードの知覚理論の素描

リードは、その生涯を、当時の哲学的主流であつた観念説の批判に捧げた。彼が観念説として位置づけるのは、デカルト、ロック、マールブランシュ、バークリ、ヒュームといった、〈観念〉を心の中の直接知覚の対象として考え、外界の物体は、心の中の観念を知覚することによつて知られるとする哲学的主張である。彼自身、若い頃は、マールシャル・カレッジにおいてジョージ・タートンの影響の下、バークリ哲学に深い共感を抱いていた。しかし、やがてヒューム哲学に接することにより、それが持つ懷疑論的結末に疑問を抱くことになる。つまり、観念説では、われわれの知識の対象が、心の中の存在物に終始することになり、いつさいの外界の知識と他の精神の知識をわれわれが持つことができなくなると、リードは考えたのである。リードによれば、バークリやヒュームの議論は、その過程においては反駁できないものである。しかし、その結論は、彼にとつてとうてい容認できないものだった。その結論がわれわれの常識に完全に反するものとなるとリードは考えたからである。それでは、いったいどこが間違っているのか。リードは、観念説の誤りは、その議論の

過程にあるのではなく、議論の前提、つまり、直接知覚の対象が観念であるという前提にあると考えたのである。

リードによれば、常識は、知覚するものを心の中の観念であるとは考えない。知覚は、外的な事物に対してのみ適用されるのである。彼の著作中に繰り返して現れるこのような主張は、彼が直接実在論を主張しているものとしてとることができる。

まず、リードの知覚理論を典型的に表したものとして捉えられる主張を見てみよう。リードは、知覚について次のように言う。

バラが近くにあるとき、心地よい感覚が生じ、バラが遠ざけられるとその感覚がなくなるのを観察すると、私は、私の本性によつて、なんらかの性質がバラにある、その性質がこの感覚の原因であると結論づけるようになる。そして、私がこの性質についての確信と信念を持つようになる心の働きが、この場合に私が知覚と呼ぶものである。(IP310)

さらに、ここでは言及されていないが、リードによれば、知覚では、対象の存在に関する信念だけでなく、対象についての概念も生じる。つまり、対象について、なんらかの概念を持たなければ(その明確性に一定の程度の幅があることも同時に彼は認めているが)、知覚はありえないと彼は考えているのである。

つまり、リードにとって、知覚の対象は心の中の観念ではなく外的な事物であり、それに対する信念と概念が生じる段階が、知覚なのである。(リードの理解において)観念説は、心の中の観念が知覚の対象であり、外的な事物は知覚の対象ではない(4)。あるいは、観念説において、外的な事物は間接的な知覚の対象とも言われる。しかし、リードの知覚の定義では、心の中に何かが生じる段階では、そもそもそれは知覚ではないのである。そして、この点においては、彼は直接實在論者であり、彼が、自らの哲学が観念説者とはつきりと区別されるものとして捉えているものなのである。

しかし、われわれはさらにリードの議論を調べる必要がある。リード自身の定義に従えば、確かに彼は直接知覚を主張していると見えよう。しかし、もしわれわれがより現代的な観点からもリードを再評価しようとするならば、リード自身の知覚の定義のみによって議論を終わるべきではないかもしれないからである。われわれは、リードが言うような対象の信念と概念が生じる最終段階だけを知覚とは言わないかもしれない。また、そのことは、当時の観念説者についても言えるだろう。例えば、ロックのような観念説者が心の中の観念を知覚の対象と言うとき、その知覚理論は、知覚にはより多くのプロセスがあることを背景に持っているのである。リードの独自の知覚の定義だけから、彼を直接知覚の支持者として捉えるだけに終始するならば、知覚の哲学において長く議論されてきた知覚の直接性・間接性の問題に、リードの見解はほとんど答えていないことになりえるし、彼自身に

とつても、彼の観念説批判は的外れだと言われる可能性すらある。

科学的な見地から、リードも、外的物体をわれわれが知覚するまでの間には、いくつかの過程があることを認めているのである。まず、物理的な過程が存在する。まず、物体は感覚器官に、直接的あるいはなんらかの媒介を通して、なんらかの印象を与える。感覚器官に与えられた印象は神経へと伝達され、そして神経は脳に印象を与える。(IP 215-246, 288) (5)

次に、心的な過程が生じる。まず、感覚が生じる。リードによれば、感覚は心の働きであり、それ自体以外に別の対象を持たない。また、一部の快苦を除いては、多くの感覚に対してわれわれは無関心であり、事実ほとんどの感覚は名前を持たない。しかし、感覚は、非常に重要な役割を持っている。リードは、この点について次のように述べている。

〔われわれにとつて〕無関心な感覚は、役に立たないどころではない。それらは、異なる事物を区別するための記号として役立ち、そして、われわれが外的な物に關して持つ情報は、これらによってもたらされるのである。(IP 312)

つまり、感覚は外界の事物に関する情報をわれわれにもたらすが、この情報がもたらされるということが、上述したような、知覚に際して生じる「概念を持つこと」であろうと考えられる。

このように、身体的過程の後に生じる感覚は、物体の概念と信念を生じさせる、このことは、感覚が知覚を生じさせる心的過程の一部をなしていることを示している。一部の例外を除いて、感覚はすべての知覚に伴う。リードはまた、この知覚を生じさせる感覚の働きについて、バークリからその記号論の説明を継承する。感覚は、いわば言語における記号の役割をはたしている。ここで、われわれの言語のように、人間の恣意的な取り決めによって定められた記号が人工的記号であるとするならば、あるものとあるものが恒常的に結合しているのを経験が発見するとき、先行するものは、それに引き続き生じるものの自然的記号であると言われるのである。そして、言語が概念や意味を示唆するのと同様に、自然的記号とされるものは、それと恒常的に結合した別の出来事を示唆するのである(6)。

このような〈示唆〉は、われわれの生得的な心の働きであり、それは、リードによれば「本性の根源的原理」なのである。そして、例えば、物体における硬さの概念なども、このようなわれわれの「本性の根源的原理」によって、感覚からもたらされるのである。

ここまで、リードの議論における、知覚が生じるまでの過程を概観してきたが、彼の議論における知覚をより緩やかに、つまり、知覚の直接性・間接性の問題を巡る伝統的問題に接近させて彼の議論を見るならば、彼を直接知覚の支持者として簡単には捉えられないことがわかる。その点を次節でより詳しく見てみることにしよう。ただ、上述したような〈知覚は

感覚に続いて生じる〉というリードの主張は、多くの哲学者がリードの知覚理論の公式見解として認めるものだが、若干の例外もないわけではない。特に、『人の知的能力に関する試論』(1915) (以下『知的能力試論』)においては、これとは異なるように見える知覚と感覚の関係も述べられており、イマーワー (John Immerwahr) などは、そちらのほうを特に重視している。その問題については、次節の最後で言及する。

## 二. 問題点

本節では、リードを直接実在論として解釈するときに生じる問題点を見てみよう。例えば、ウーズリーは、前節で取り上げた、バラの知覚に関する箇所について、次のように述べている。

その簡明さにもかかわらず、これは、リードの知覚理論に関する全著作における、彼のもっとも明晰な言明である。(性質を知覚すること＝感覚の原因がこれこれのものであると信じること)。すなわち、知覚がそれについての信念である感覚は、直接的な把握であらうが、知覚は、どのような意味においても、あらゆる対象の直接的な把握ではない。(Woolley, 1941: 151n. (7))

つまり、ウーズリーは、リードにおいて知覚は、直接把握の対象である感覚を経由して成立するという点で、直接的なものではないと主張しているのである。

もうひとりの研究者の考察をとりあげよう。トッド・バラスは、感覚の介在と知覚の直接性について、詳細に検討を加えてくる(Buras, 2002)。彼は、直接性(あるいは間接性)を三つに分類する。そして、彼はそれぞれのそれぞれを、(一) 認知的直接性(epistemic immediacy) (二) 表象的直接性(presentational immediacy) (三) 指示的直接性(referential immediacy)と名づけている。もちろん、リード自身がこのような区別を行っているわけではない。しかし、リードの議論は、必ずしも明確に行われているわけではないので、このように様々な観点から検討することは有益だろう。

(一)の認知的直接性とは、知覚的信念が推論によって形成されない場合を直接的な知覚だとみなすものである。(二)の表象的直接性とは、知覚者がある概念のもとで対象を知覚する場合に、その概念が、感覚的なものに言及することのない絶対的、つまり非関係的なものである場合に、知覚を直接的なものだとするものである。例えば、〈硬い〉という概念のもとで対象を知覚する場合、その概念が、硬いものを触ったときに生じる感覚に言及することなく、〈結合力〉といったような物そのものの性質を記述する概念である場合に、硬いものは表象的に直接知覚されることになる<sup>8)</sup>。(つまり、「物の成分がしっかりとくっついている」という概念が物を触ったときに生じるような場合を考えればよい。)(三)の指示的直接性とは、もし物質的性質が、何か別のもの(リードの場合は〈感覚〉)を最初に把握されることなしに把握されるならば、その知覚的信念は直接的であるとされる。この場

合、感覚は、物質的性質を把握するための代理人のような役割を担うことになる。

バラスは、リードにおいて、(一)と(二)の直接性は成立しているが、(三)については否定する<sup>9)</sup>。なぜなら、既に述べたように感覚は、自己対象的な心の働きである。そして、リードにおいて、感覚は感じられているときにのみ存在するのであり、感じられるがままの存在である。結果的に、われわれが物質的性質を知覚するためには、まず感覚を感じなくてはならない。ゆえに、リードにおいては(三)の意味での知覚の直接性は維持できないと、バラスは言うのである。バラスの分析は、結論としては、ウーズリーの簡潔な主張を、より詳細に検討し、発展させたものであると言えるだろう。

前節で素描したリードにおける知覚と感覚の関係からも見て取れるだろうが、リードの直接实在論、つまり、われわれは物質(の性質)を直接知覚するという主張が問題視されるのは、そこに感覚が介在しているからである。そして、異なる論陣に属する研究者たちは、まさにこの点に焦点をあてて攻防を繰り返してきたのである。

ここで、前節の最後で言及しておいた問題について述べることにしよう。前節では、リードの知覚理論を素描したが、一方で、それとは若干異なるように見える知覚に関する説明も行っている。リードは『知的能力試論』で〈知覚〉を説明する際に、次のような説明をあたえることがある。

外的な感官は、二重の領域を持っている。つまり、われ

われを感じさせることとわれわれを知覚させることである。感官は、われわれに、あるものは心地よく、あるものは苦痛であり、またあるものは「われわれにとつて」無関心であるような、多様な感覚を備え付ける。同時に、感官は、われわれに、外的対象の概念と外的対象の存在に関する抗しがない信念を与える。外的対象の概念は自然の産物である。われわれの感官が与えるそれら「外的対象」の存在の信念も自然の産物である。そしてそれに伴う感覚も同様である。自然が感官によつて生み出す概念と信念を、われわれは知覚と言う。知覚に付随する感じ(feeling)をわれわれは感覚と呼ぶ。知覚とそれに対応する感覚は、同時に生み出される。(P318)

ここでは、リードは、感覚は知覚に付随し、しかも同時に生み出されると言う。つまり、ここでのリードの主張は、感覚が知覚を生み出すというよりも、身体的印象から感覚と知覚が同時に続いて生じるかのように解釈できるのである。

イマーワーなどは、ここでのリードの主張に注目する。彼は、『探求』(=Inq)において、リードが感覚を記号として、そしてそれによつて知覚が生み出される記号論的知覚論を展開していることを認め、これはリードにおける非直接実在論であると言う。しかし、イマーワーは、リードが記号としての感覚を『知的能力試論』では廃棄し、物理的印象の後に、直接に知覚が生じる立場へと変更したのだと主張している。(感覚もまた知覚と同時に生じることは、むしろ認められて

いる。)つまり、リードの知覚論は、『探求』から『知的能力試論』の間に、非直接実在論から直接実在論へと発展したのだと、彼は結論付けるのである(Immerwahr, 1978)。

イマーワーの考察は、確かに興味深いものであり、さきほどのリードの主張を全面的に認めるならば、リードにおける直接実在論の問題は、かなり軽減されるだろう。しかし、イマーワーも認めているように、リード自身が、『知的能力試論』について、その多くを既に『探求』で述べていることを認めているうえに、さらに、感覚が知覚を生み出すということは、『知的能力試論』においても述べられている。事実、私が前節で取り上げた箇所などは、その典型的なものである(P310)。イマーワーは、それを、『知的能力試論』における『探求』の残滓であると言う。確かにその可能性は排除できないが、もう少し慎重にこの問題を考えてもよいかもしれない。

たしかに、リードは、先ほど取り上げた箇所で、感覚と知覚が同時に生み出されると述べている。しかし、この「同時に」が、はたしてイマーワーが言うように、厳密な時間的同時性を意図して述べられたものであるのかどうかもあきらかではない。つまり、より緩やかな意味でそれは用いられており、知覚と感覚がいつも同じ機会におきることが述べられているだけかもしれない。イマーワーは、記号論的知覚論を、非直接実在論であると位置づけているが、もし、記号論の実在論と直接実在論が両立しうることが示されるならば、イマーワーの言う、『探求』と『知的能力試論』の間に見られ

るいくつかの混乱も、実は混乱ではないということになり、リードの議論は、基本的には整合的であるということになる。そこで、私は、『探求』と『知的能力試論』について、非直接実在論から直接実在論への発展としてではなく、いずれも直接実在論を展開したものであるという可能性を考察していくことにしたい。

### 三、直接実在論

リードを直接実在論者として考える研究者の間で、少なくとも共通していることは、われわれの本性的成り立ちによる外的物体の概念と信念は、推論ではないという意味で直接的だということである。この点は、リード自身が、彼の著作中において頻繁に述べることもある。

しかし、たとえ、リードの直接実在論を、知覚による外的対象に関する知識が推論によるものではないという点にとどめたとしても問題は残る。前節で採りあげたパパスやウーズリーの批判から見られるように、知覚を媒介する感覚が意識の対象であるならば、直接実在論を限定的に捉えたとしても、リードを直接実在論者とするにはさらなる説明が必要だろう。

もっとも、感覚が意識の対象であるという点を否定することはできる。リードにおいて、知覚において生じる信念や概念は、感覚に対するものではなく、外的物体に対するものである。すでに第一節でみたように、リードは、ほとんどの感覚は、われわれにとって無関心で、ほとんど気づかれず、名

前さえもたないと言う。例えば、ある研究者は、認識的直接実在論として、知覚的知識が「感覚についての直接に知られた、あるいは直接に正当化された信念に基づかない」とときに、直接的で、非推論的であると定義している。(Pappas, 1989)

近年、コペンハーバーは、リードを直接実在論として解釈するための直接実在論のある定義を提案した。彼は、たとえば、感覚が意識に対して〈透明〉だとしても、感覚が外的物体に関する情報をもたらすものであり、そこから知識を引き出す可能性がある以上、パパスのように定義しても、リードを直接実在論として見ることはできないとしてパパスを批判している。(Copenhaver, 2004)

コペンハーバーは、リードが観念説を批判するのは、感覚が物体を、感覚と物体との内的関係によって表象するとする説であるからだと分析する。内的な関係とは、例えば類似による関係などがそれにあたる。つまり、表象物が表象物自身の内的特性などによって被表象物を表象する関係を意味している。また、外的関係とは、表象物と被表象物が内的な関係によるのではなく、外在的な規則などによって表象を行う関係である。つまり、リードが提示するものは、外的関係を重視する説、つまり、感覚がその内的関係によって物体を知覚させるのではなく、単なる外的な関係によって物体を知覚させる理論であり、それを、(逆説的ではあるが)媒介された直接実在論としてみなそうと、コペンハーバーは提案するのである。この考えが、説得力を持つのは、リードが、当時の多くの哲学者と同様、われわれの知覚には物質的な媒介が存

在していることを積極的に認めている点にある。物質的な媒介、つまり物質―感覚器官―神経―脳にいたる連続する印象の伝達は、それぞれに属する内的関係によって情報を伝達しているわけではない。単に、神によって定められた外的な関係によってそうなっているに過ぎない。つまり、コペンハーバーは、これらの感覚もまた、この外的な関係によって結合された一項目であるとみなそうと言うのである。

さらに、付言すると、コペンハーバーがこのことを示すために用いる議論は、かつてデローズが強調し、前節で紹介したバラスが〈表象的直接性〉で述べたものと共通点がある。つまり、感覚とそれが示唆する物体の性質の間にはなんら共通点がないという、いわゆるリードの反感覚主義に関する議論なのである。

#### 四、感覚と概念

これまで見てきたように、リードを直接実在論として見る研究者たちは、しばしばリードを反感覚主義者として捉え、その直接実在論の内容を明らかにしようとしている。しかし、この議論は、はたしてリードの直接実在論を十分に説明しているだろうか。というのも、彼らの反感覚主義的解釈は、物体の一次性質に関する議論に依拠したものとなっているからである。例えば、バラスの表象的直接性についての議論を見てもわかるように、知覚的信念の直接性が確保されるためには、知覚において生じる概念は、絶対的なもの、つまり、感覚内容に由来することのないものでなければならないと彼ら

は考えている。そして、リードの場合、感覚がそれが示唆する性質と完全に区別されるのは、主として一次性質の場合なのである。

リードは、ロックとは異なる理由から、一次性質と二次性質の区別を主張している<sup>10</sup>。そして、確かに、リードは、知覚に際して、一次性質については絶対的な概念が、そして二次性質については相対的な概念が生じると考えている。例えば、リードのお気に入りの例である〈硬さ〉という一次性質の概念は、〈物体における結合力〉という形で言い表される。ここには、物に触ったときの感じに対する言及は何も含まれていない。

一方、二次性質の場合はこれとは異なる。例えば、〈熱さ〉や〈冷たさ〉について、リードは次のように言う。

それら〔熱さや冷たさ〕は、われわれが同じ名前を与え  
る感覚の未知の原因あるいは機会因として、われわれに  
よって想われるだけである。常識は、これらの性質の本  
性について何も述べないが、それは、明白にその存在を  
指示する。(Inq 54)

二次性質に関する概念は、〈ある感覚を生み出す未知の原因〉という概念である。つまり、二次性質の概念は、一次性質と異なり、感覚への言及がそこに含まれている。これが、リードの反感覚主義的議論を重視する研究者によって、知覚における物質概念の考察から二次性質が排除される原因だと



言つてよいだろう。

彼らの主張を認めるならば、リードは、物体の一次性質については直接实在論、二次性質については非直接实在論を採用していることになる。確かに、音や香りなどの二次性質について言えば、われわれが持つている感覚がそのまま物体に属していないと一般に考えられているかもしれない。つまり、それらの性質が間接的な知覚であることは、一般に受け入れられるかもしれない（確証はないが）。しかし、ひとつ問題があるように思われるのは、色の場合である<sup>11</sup>。

リードは、色についても他の二次性質と同様に扱う。リードは、色の感覚として「視覚の色」があると言う。これは、いわば色の見えと言えらるようなものである。そして、これは物体に属する色の性質とは異なるものである。物体の色の性質とは、われわれの視覚の色を生み出す未知の性質である。そして、リードは、一貫して、色の名前は視覚の色に対してつけられたものではなく、物体に属する感覚の原因となる未知のものに対してつけられたのだと主張する。

われわれの言及する色が、見えではなく物の性質であるということ自体は、問題がないわけではないが、リードがしばしば訴える常識的な見方と一致する点もある。例えば、色の恒常性のような問題に対してある種の説明能力を持つたろう。しかし、たとえ色に関する信念が、物の性質に対するものであるとしても、それが視覚の色と相關的であるならば、これまでの研究者の議論に従えば、色の知覚は非直接的な知覚ということになる。しかし、これは、リードが観念説に対して

常識を擁護しようとする彼の立場と両立しうるだろうか。常識的な立場とは、色の表れが変化することを了解しつつも、しかし同じ色であり、しかも、そのような視覚の色と物の性質を何らかの形で含んだ物の表面を直接知覚していると考えたのではないだろうか<sup>12</sup>。

前節で示したコペンハーバーのような解決は、この常識的な信念とリードの知覚理論の関係を考えるならば、それが適切なものであるかどうかについて疑問を感じさせるものである。彼は、感覚と物の性質の間に内的関係がないことによって感覚から知覚への移行を直接的であると定義した。しかし、このような解決は、リードが擁護しようとした常識的信念の解明になるとは思えない。哲学者でない人々は、このような知覚における諸段階の関係を理解することによって物を直接知覚していると考えるわけではないだろう。むしろ、それはより現象に接近した形で考えられたものではないだろうか。

私の考えでは、コペンハーバーが、リードの観念説批判をうまく利用するかたちで直接实在論を定義しようとしたのは正しい。しかし、それは彼とは別のアプローチでされるべきだと思われる。

## 五、物体概念

リードによれば、感覚と知覚の対象は、しばしば同じ名前を持つ。これは、両者はつねに相伴って生じるので、それを分離することが困難だからである。

われわれ自身の感覚(feeling)を適切に注視することは、非常に困難なのだ。それらは、観察されないまま心を通過し、すぐに、自然がそれらに意味表示させることを意図したものに道を譲るようになっているので、それらを静止させ、精査することは極端に難しいのである。そして、われわれがこの能力を得たと思ったときでも、おそらく心は、感覚とそれに関連付けられた性質の間を揺れ動く。その結果、それら「感覚と性質」は混ざり合い、その両方から合成された何かを想像力に提示するので。(Ing 74) (傍点は筆者が付け加えた。)

示唆する記号(つまり感覚)と示唆されるもの(物の性質の概念)は、想像力において混合し結合する。私は、ここにリードの直接実在論を解く鍵があると、私は考える。

〈示唆〉についてリードに影響を与えたバークリにおいても、同様の問題が論じられることがある。バークリにおいて、三次元の配置を持つ視野や物体の知覚は、視覚に固有の観念である色の観念の知覚が触覚の観念を示唆することで成立する。ここで、この示唆の介在を考えるならば、バークリは、物体を直接知覚するとは言えないのではないかと考えられるのである<sup>13)</sup>。しかし、私の考えでは、バークリにおいて示唆されたもの(距離の場合においては触覚観念)は、それが心の中に示唆されることで、もともとあった視覚観念と結合する。そして、その混合物は心の中に存在するので、心は直接それを知覚するようになるのである。その意味では、物

体は直接知覚の対象と言える<sup>14)</sup>。

もちろん、リードに対して、このバークリの議論をそのままあてはめることはできない。リードにとって、物体とは心の中の存在ではないからである。それにもかかわらず、私のこのバークリ解釈は、リードが抱える問題に対しても応用できるように思われる。

まず、リードにおいて、知覚が成立する要件となるのは、知覚対象の概念とその外的存在に関する信念が生じることである。ここで概念について考察してみよう。

リードによれば、知覚には必ず概念が伴わなければならない。これは、われわれが対象を知覚するときに、対象の概念によって対象を知覚することを意味していると思われる。パラスの表現を借用するならば、ある概念によって対象を知覚するということになる<sup>15)</sup>。上述したように、物体には一次性質と二次性質があり、そのいずれもが物体の性質として認められているならば、物体の概念は、この両方を包摂するものであるはずである。つまり、物体の概念には、絶対的な概念である一次性質の概念と、感覚への言及が含まれる相対的な二次性質の概念の両方が含まれていることになる。となると、物体が生み出す感覚はたとえ意識の主要な対象ではなく、微弱なものではあっても、物体の概念に含意されていないければならない。反感覚主義的解釈を採用する研究者たちは、この感覚の含意が直接実在論を危うくすると考えているだろうが、私はそうは思わない。その理由を以下に述べよう。

先ほどのリードの言葉が示しているように、感覚と性質

は、概念レベルで混ざり合い、その両方から合成された何かを作り出す。もちろん、ここで私が性質と言うものは、物そのものに存在する未知なものではなく、その性質の概念であると考えられるべきだろう。なぜなら、物の性質は、あくまでもわれわれの外に存在するものだからである。

この〈感覚―性質〉概念の複合物は、いわばあらたな概念的なものであると考えられる。そして、私の考えでは、物体の知覚はこの概念によってなされるのである。例えば、リードは、ある箇所において、示唆されたものもまた直接的になると述べている。(p. 278) われわれはまず、記号を直接把握するが、それによって示唆されるものも示唆されたその結果として直接把握の対象となるのである。この言葉は、感覚が物の性質の概念と結合するというリードの言葉とも調和する。今私の提示した、〈感覚―性質〉概念の複合概念のもとで物体を知覚するという解釈によって考えれば、感覚と物の性質の概念は、両者が結合することによって、改めて心の直接的な対象となりうるのである。

また、この〈感覚―性質〉概念複合説では、〈感覚が知覚における情報伝達者の役割を担う〉ことを積極的に認めることができる(16)。また、〈感覚が直接把握の対象である〉ことも同様に認められる。しかし、それにもかかわらずリードを非直接実在論者とみなす必要は生じない。まず、前者について言えば、感覚が情報伝達者であるとしても、その感覚が知覚概念に組み込まれるということは、われわれはたんに感覚を通して知覚するのではなく、〈感覚が組み込まれた知覚概

念〉のもとで知覚することになるからである。また、後者について言えば、感覚は知覚概念の一部となるので、その概念の一部を心が直接把握していても、同時に、その概念もつとつというそのことによって知覚がなされることになる。それゆえ、〈感覚―性質〉複合概念のうちの感覚が直接把握されていても、同時にこの概念によって知覚が成立しているのので、この知覚を間接的なものとして捉える必要はないのである。知覚における感覚と概念の関係をこのように捉えることによって、私は、バラスやウーズリーの指摘に対して、リードを直接実在論者として擁護できると考えるのである。

## 六．観念説批判

前節で提示した解釈を別の観点から検討しよう。まず、この解釈に対する問題点と考えるものをひとつ採りあげておこう。リードは、他の二次性質の感覚とは異なり、色に関して、それが感覚の名前では絶対にあリえないと主張する。色はいかなるときでも感覚を生み出す性質に対してつけられた名前前であるとリードは言うのである。しかし、その色が生み出す感覚の存在をリードは認めており、これはいわば色の現われのことをさしている。また、既に見たように、リードによれば感覚はそれ自身以外の対象を持たない心の働きである。逆に言えば、感覚はそれ自身を対象とするので、われわれが見ていると考えている色の現われを、われわれは注視することと〈見る〉ことができる。となると、前節で、私は感覚を知覚における概念に組み込んだが、知覚において視野に表れ

ているこの色の現れは、心の中の存在ということになるのだろうか。リードの色に関する主張は、まるで観念説と軌を一にするもののようにも見える。この問題は、私が前節で提示した解釈の中でどのように捉えられるべきだろうか。リードにとって、知覚とはあくまでも外的な対象の知覚なのに、である。

ここで、リードの観念説批判に眼を向けよう。リードは、『知的能力試論』のはじめに、言語の問題を採りあげる。リードは、観念説が誤りに陥った原因のひとつに、言語の不明瞭さを挙げている。観念説は観念が心の中に存在すると主張するが、延長を持ち、重さを持つとされる観念が心の中にあると存在することは、リードによれば言語の誤用に他ならない。

リードは、観念説がかかる誤りに陥ったのは、そこにある前提が働いていたからであると考ええる。つまり、物体がある別の物体に作用するとき、その物体は直接その別の物体に接触するか、あるいは別の物体に直接作用するような媒介物が存在しなければならぬと考えられるが、観念説者は、心の作用についても同じことが言えると考えた。つまり、心が何かを知覚するためには、その知覚対象は心と直接接触する、言い換えれば心の中になければならないことが観念説において前提されているとリードは考えたのである。そして、これは、彼によれば誤った類推なのである。

観念説に対して、リードはまったく異なる存在論を展開する。知覚の対象はわれわれの外に実際に存在する物であり、われわれが思い出すのは、過去の物である。われわれがりん

ごを眼の前にするとき、われわれが知覚するのは心の中のもの。この観念ではなく、われわれの外に現実に存在するりんごである。われわれが昨日食べたりんごを思い出すとき、われわれの記憶の対象は、今心の中に存在する観念ではなく、昨日存在したりんごなのである。

しかし、少なくとも観念のようなものが、たとえ比喩的であつても（心の中）に存在しているように思える場合があると考えられるかもしれない。例えば、現実に存在しないものについて思考を巡らせる場合などはどうなのだろうか。これに対するリードの主張はやはり知覚・記憶の場合と一貫したものである。彼は、心の中にそのような思考の対象があるとは言わない。リードの次の言葉は、彼の存在論を明確に表している。

今、次のようにたずねられたとしたらどうだろうか。円の観念とは何かと。私は、それは円の概念だと答えよう。この概念の直接の対象は何か（とたずねられたらどうだろうか）。その直接で唯一の対象は円である。しかし、この円はどこにあるのか（とたずねられたらどうだろうか）。それはどこにもないのだ。（P.374）

これは、概念に関するリードの分析である。このような場合でも観念説者はなんらかの観念が心の中に存在すると言うだろう。しかし、リードは、そういった（存在する）を否定する（17）。このようなリードの主張は、やや奇妙なものに思

えるかもしれない。しかし、このような議論は、現代においても、例えばハーマンなどの議論において見出されるものであり、その点を考えるならば、その奇妙さは軽減されるかもしれない(8)。(Harnan, 1990: 35-37)

そして、このようなリードの存在論は、前節で提示した私の解釈にも適用できる。例えば、視覚的に物を見る場合、視覚的現われとしての色は感覚である。しかし、われわれはそれを知覚するわけではない。知覚は、感覚が物の性質の概念と外的存在という信念を示唆することによって生じる。前節で私の提示した解釈では、この概念の周辺部に、感覚である視覚的現われが融合していることになる。この色の現象態は、それ自身を把握しつつある心の働きである(9)。そしてこの把握されるという側面が、色の現象態として現れていると考えることができる。しかし、この把握されるという側面での現象態はどこにあるのか。先ほどの概念に関する記述を応用するならば、どこにもないのである。(心の働きとしてならば心の中にあると言えようが)。それゆえ、知覚において生じる概念に、この感覚である色(の現象態)が含まれていたらとしても、それ自体には存在という概念は伴わないので、必然的に、知覚概念は、同時に生じる外的存在という信念のもとで考えられることになる。ゆえに、感覚が知覚概念の成分であったとしても、知覚が外的なものに対してなされるということと矛盾するわけではない。

## 七. 知覚と感覚の区別

次に、リードが観念説批判に対して強調する知覚と感覚の区別の議論が、私の解釈と一貫しうるかということを考えよう。

リードは、観念説者の大きな誤りのひとつとして、感覚と知覚の区別をしていないことをあげる。このリードの観念説解釈は大きな問題をはらんでいると考えられるが、ここではその検討は行わない。

私が本考察で提示してきた解釈は、リードによるこの感覚と知覚の厳しい区別と矛盾しないだろうか。私は「しない」と答える。感覚が、知覚概念の周辺部に組み込まれるということは、感覚と知覚を区別しないということではない。私の提示する解釈でも感覚と知覚は次の二つの仕方で区別される。第一に、過程において両者は異なる。知覚概念の発生には、まず感覚そのものが生じることが要件となる。知覚概念にその感覚が組み込まれたとしても、その知覚概念は、もはや感覚そのものではない。ゆえに両者は区別される。

また、第二に、知覚概念に組み込まれた感覚は、知覚概念に完全に「溶け込んでいる」と考える必要はない。比喩的に言えば、私が提示している知覚概念は、ある種の多面的な特性をもっていると考えればよい。通常は、外的対象の信念とともに、外的な物体(あるいはその性質)のみがわれわれの意識化に顕在化しているが、そこに含まれている感覚的要素を表に出す、つまり、感覚的要素のみを注視することも可

能なものと考えればよい。このことは、リードの説ともよく一致する。なぜなら、リードは、通常、感覚は外的な性質を示唆する記号としてしか働かないが、それ自身に注目するとそれは心の働きであるというような主張をしている。また、第5節の冒頭で取り上げた箇所においても「心は、感覚とそれに関連付けられた性質の間を揺れ動く」とリードは言う。心は何かを知覚しているときでさえ、その感覚的要素に向かうのである。つまり、感覚が知覚概念に組み込まれたとしても、心は、外的対象を示す箇所と感覚そのものを示す箇所を区別して意識しうるのである。ゆえに、両者の区別は保持される。

## 八、現象に即して

最後に、直接实在論をどのように定義するかについて私の解釈とコペンハーバーの解釈の違いについて述べ、考察を終えることにしよう。彼は、記号としての感覚とそれが示唆する知覚概念の間に内在的關係がないことを示すことによって、知覚表象説の定義を構築しようとした。しかし、リードの直接实在論的見解が、常識擁護の側面を持っていることを考えるならば、コペンハーバーのように知覚が生じる過程における項目の關係に議論を終始することは、常識的な信念の説明としては不十分に思える。哲学者でない人が、外的対象を直接知覚すると考えるとき、それは、たんにコペンハーバーが述べたような点のみに注目してそう考えられているわけではないだろう。常識の立場から言えば、むしろあるものを知覚

しているという現象に即してそのような主張はなされているはずである。直接知覚がラッセル流の直知のような観点からしばしば考えられてきたのは、まさに常識のそのような側面を捉えたものであろう。

もっとも、リードの知覚は、あきらかにラッセル流の直知のようなものとは異なっている。知覚に感覚の媒介が生じる時点で、知覚過程における考察が不可欠なことは否定しがたい。しかし、もしそこから生じた解釈に現象に即した常識的信念との対応がなければ、やはり問題があるように思われる。

私が提示した解釈は、感覚を知覚概念の周辺部に組み込むことによって、現象に即した常識的信念とも一致する。単独の感覚によって示唆された〈感覚を含む知覚概念〉のもとで対象を知覚するということは、例えば視覚の場合、まさに〈視覚的現われ〉が組み込まれた知覚概念のもとで物を見るということである。示唆されたものもまた直接知覚の対象であるというリードの主張により、われわれが物を見ると通常考える場面は、直接的に知覚されたものである。そして、われわれは通常はわずかな色の变化なども意識せずに物を知覚しているが、時にはその現われとしての色に注目することもできるという事実とも私の解釈は一致するのである。

以上で、リードの知覚理論の考察を終えることにする。私は、リードを直接实在論者として示そうとしてきた。知覚が直接的であるかどうかという問題は、現代においても興味深い問題のひとつであろう。さらに、このようなリードの知覚

理論の考察は、例えば現代における色の投影説などこの関係についての考察などへとも発展しうるものである。しかしリードにおける議論を見てもわかるように、直接实在論と非直接实在論の関係は、極めて複雑であり、その境界線は不明確なものとなっている。逆にそのことが多くの哲学者をひきつける理由のひとつであろう。

# 【参考文献】

- Barry, Philip de (2002), *Thomas Reid and Scepticism* (London: Routledge).
- Buras, J. Todd (2002), "The Problem with Reid's Direct Realism," *The Philosophical Quarterly* 52, pp. 457-477.
- Copenhaver, Rebecca (2004), "A Realism for Reid: Mediated but Direct," *British Journal for the History of Philosophy* 12, pp. 61-74.
- DeRose, Keith (1989), "Reid's Anti-Sensationalism and His Realism," *the Philosophical Review* 98, pp. 313-348.
- Falkenstein, Lorne (2000), "Reid's Account of Localization," *Philosophy and Phenomenological Research* 61, pp. 305-328.
- Ganson, Todd Stuart (2002), "Reid on Colour," *British Journal for the History of Philosophy* 10, pp. 231-242.
- Hardin, C. L. (1993), *Color for Philosophers: Unweaving the Rainbow* (Indianapolis: Hackett Pub).
- Harman, Gilbert (1990), "The Intrinsic Quality of Experience," *Philosophical Perspective 4: Action Theory and Philosophy of Mind*, ed. James E. Tomberlin (California: Ridgeview), pp. 31-52.
- Heath, Peter (1978), "Reid on Conceiving and Imagining," *The Monist* 61, pp. 220-228.
- Immerwahr, John (1978), "The Development of Reid's Realism," *The Monist* 61, pp. 245-256.
- Lether, Keith (1978), "Reid on Primary and Secondary Qualities," *The Monist* 61, 184-191.
- Pappas, George (1989), "Sensation and Perception in Reid," *Nous* 23, pp. 155-167.
- Pitcher, George (1986), "Berkeley on the Perception of Objects," *Journal of the History of Philosophy* 24.
- Winkler, Kenneth P. (1989), *Berkeley: an Interpretation* (Oxford: Oxford University Press).
- Wolterstorff, Nicholas (2000), "Thomas Reid's Account of the Objectivated Character of Perception," *Reid Studies* 4, pp. 3-15.
- Woolley, A. D. (ed.) (1941), *Reid's Essays on the Intellectual Powers of Man* (London: Macmillan).
- Yolton, John W. (1984), *Perceptual Acquaintance: From Descartes to Reid* (Minneapolis: University of Minnesota Press).
- 朝広謙次郎(訳) (2004),『心の哲学』知泉書館。
- 長尾伸一(2004),『トマス・リーデー實在論・幾何学・ユークレミア』名古屋大学出版会。
- 戸田剛文(2006),『バークリにおける経験』現象学年報22。日本現象学会編, pp. 41-50。

# 【註】

- (1) 本論文について、神野慧一郎氏に多くの貴重な助言をいただき、いくつかの節で私は議論を加筆した。ここに謝

辞を表したい。

(2) 要するに、カント自身はリードの著作を読んでおらず、ほとんどその検討をしていないということである。Woolley, 1941: xiv. 本論文では、参照論文一覧を論文末にあげ、参照箇所は、(筆者、出版年)あるいは(筆者、出版年: 頁数)の形式で示している。なお、リードの著作については、註5を参照。

(3) チザムおよびレーラーをはじめとする近年のリードの再評価については、以下のものを参照。Barry, 2002: 3-4.

(4) 観念をリードのように捉えない解釈もあることを記しておく。Yolton, 1984.

(5) リードの著作は以下の物を用いている。Essays on the Intellectual Powers of Man, in Philosophical Works 8<sup>th</sup> edition, ed. Sir William Hamilton (Hildesheim: Georg Olms, 1983). 以下では (IP 頁数) と表す。An Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense, ed. Derek R. Brookes (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1997). 以下では (Inq 頁数) と表す。(6) この〈示唆〉という言葉は、日本語で用いられるものとは意味が必ずしも同じではない。日本語では、誰からある考えが示唆されると、それについて推論を行うというような用いられ方がある。しかし、リードやパークリにおいて、〈示唆〉は〈推論〉とは区別されるものである。また、リードやパークリにおいて、推論とは無意識的なものではなく、意識的なものに限定的に用いられる。また、リードにおける〈示唆〉については、以下の論文も参照。DeRose, 1989. Immerwahr, 1978.

(7) ハミルトンも同様の趣旨のことを全集の註に記してい

る。(p.310n)

(8) 注六で述べたように、リードやパークリにおいて、示唆の働きは推論とは異なる。それゆえ、バラスが(二)をリードにおいて認めることは、正しい。また、(二)における概念について若干補足しておく、概念が絶対的なものではなく、関係的なものである場合には、その概念は「これこれの感覚を生み出す性質」というような形で記述される概念であることになる。また、これらの概念形成の仕組みがいかなるものであるのかという問題もあるが、それは別稿に譲りたい。

(9) リードにおいて、示唆される物質概念が、感覚とは異なるものによって構成されていることは、DeRose が強く主張するところである。DeRose, 1989: 322-326.

(10) リードの一次性質と二次性質の区別については、次の論文が詳しい。Lehrer, 1978.

(11) リードにおける色の問題は、現代の色の主観主義と客観主義の議論などともに、研究者を悩ませる大きな問題のひとつである。Cf. Ganson (2002). Falkenstein (2000).

(12) 直接知覚の問題だけでなく、色を徹底的に客観主義的に扱うならば、その色は、われわれの日常的な色のカテゴリーとは対応していないという批判も可能であろう。この点については、現代の色の議論に大きな影響を与えたハーディングの議論が参考になる。(Hardin: 1993) ただし、リードの時代には、現代におけるようにメタメリズムなどについての科学的知識はまだ発見されていないので、この点をあまり強調することはするべきではないかもしれない。

(13) パークリにおける直接知覚の問題については、以下の



ものを参照。Picher, 1986; Winkler, 1989.

(14) 視覚観念から物体観念の生成については、次の拙論において論じている。戸田、2006.

(15) ただし、留意しておかなければならないのは、リードの言う概念とは、静的な心の対象のようなものではない。リードによれば、概念とは対象をある内容によって把握する心の働きである。それゆえ、表現の難しさから〈概念〉を何か対象のようなもののように述べている箇所でも、やはりそれは心の働きであると理解されたい。

(16) この点からリードを非直接実在論者としてみなす見解がある。Wolterstorff, 2000.

(17) リードにおける〈概念〉および想像における心像に関して考察したものに以下のものがある。Heath, 1978.

(18) ハーマンは、〈見る〉などの知覚を、〈探す〉という事例と類比的に考える。誰かが存在しない物を探しているとき、彼は、心の中のイメージを探しているわけではない。彼は、単純に、存在していない物を探しているのである。

(19) 現われに見えるものが同時に心の働きであるということとは、やや奇妙に見えるかもしれない。しかし、これは確かにリードの公式見解なのである。この奇妙さは、リードの主張が、チザムなどの副詞的知覚説に近いものであると考えるならば、かなり軽減されるだろう。事実、チザムがリードから多くの影響を受けていることは、これまでも指摘されてきたことである。